

軍報道部

島田一男

青樹社刊



H. Ando
1970

軍報道部

定価 350円

昭和45年3月25日 発行

著者 島田 一 男

発行人 土 井 勇

東京都千代田区三崎町2-6-7 青 樹 社

電話(261)9766番・(263)7267番 振替東京 47648 番
落丁・乱丁本はお取り替え致します

0093-412301-3828

軍
報
道
部

目次

軍報道部	五
反満抗日軍	二四
遼山部隊	一四
満州ひめゆり部隊	一六
逃亡の歴史	二〇
愚者の毒	三九

装
幀

小
林
秀
美

軍 報 道 部

関特演報道隊前夜^{かんとくえん}

1

「——やア……、相変らず飛んでるなア……」

新京駅の前に立った満蒙日報の記者井上大吉は、初秋の朝空をおおって飛んでいる鳥の大群を見上げた。

昭和十七年の九月はじめ……。

冬の早い満州の空気は、防暑服姿の大吉には、ちよつぴり涼し過ぎた。

その昔、清朝の太祖愛親覚羅奴爾哈赤^{あいしんかくらヌルハチ}がこの付近で戦ったとき、鳥によって敗戦をまぬかれたと云

う伝説がある。以来数百年、鳥は神鳥と呼ばれて保護され、この都の空を乱舞し続けて来たのであった。

大吉には見馴れた風景だった。——恐らく万を以て数える大群であろう。二年前までは、この凄まじい鳥の群舞を、朝夕眺めていたのである。

が……、大吉は、いままでになくしみじみとした気持ちで、大空の黒い影を見詰めていた。

——この鳥……、果して神鳥として、この度も清朝の末裔溥儀皇帝に幸いするであろうか……。いや、日本にも……。

大吉は、下げていたポストンバッグを胸に抱きしめて、大きな溜め息をついた。

「——おい……、井上君じゃないか……」

不意に呼びかけられた大吉は振返って、思わず笑いを浮かべた。

「——あー、近藤さん……」

関東軍報道部長の近藤中佐が立っていたのである。

「君が帰ってくることは、宇田川君から聞いていたよ。いま着いたのか？」

「はあ……。またお世話になります」

「じゃ、宮脇さんと、入れ違いだったな」

「宮脇中佐ですか？」

「大佐だよ、いまは………」

三年前までの関東軍報道班長が、宮脇中佐だった。その後、予備役編入となって、京都へ帰っていったのだが……。

「現役復帰ですか？」

「大佐になってね、今度は北滿第一線の部隊長だ」

「関特演の飛ばっちりですね」

「おい……」

近藤中佐はチラッと、辺りへ眼を配った。

「単身赴任か？」

「この中に入っていますよ」

大吉は、抱えたボストンバッグを、ソッと叩いた。

「そうか……。いつ？」

「十日ほど前に、百カ日を済ませました」

「それはどうも……。ちっとも知らなかった。どうだ、お茶でも呑もうか」

大吉は、近藤中佐のあとについて、駅の食堂へ行った。

——おや……。

大吉は、突然、吹き出しそうになった。——近藤中佐が、ちよいと左肩をあげ、窮窟そうに、気取った歩き方をしている。参謀肩章が、誇らしげに揺れているのだ……。

「近藤さん……、おめでとう」

椅子に着くと、大吉が笑いながら挨拶した。

「なにが？」

「念願の肩章がついたじゃありませんか」

「いやァ……」

近藤中佐は、照れたように笑った。

「去年の十月に、司令部の機構改革があったんだ。そのときに、いままで参謀部二課の下についていた報道班が、独立して報道部になり、参謀長直属になった……。つまりわしは、班が部に昇格したお蔭で参謀肩章を吊ることになったのだよ」

「その肩章は、尉官佐官の憧れの的らしいですな」

「うん……、若い頃は、閣下と云われるより参謀どのと呼ばれたいからなァ」

そう云って無邪気に笑う近藤中佐に、大吉も思わず吊りこまれて笑った。

——いいひとだ……。随分いろんな兵隊とつきあったが、こんな善人は少なかった。

「しかし、報道部の昇格も、関特演のためじゃないんですか？」

「おい……」

近藤中佐の顔から、ふっと、笑いが消えた。

「余り、大きな声で云うなよ」

「なぜです？」

「極秘だ」

「え?!」

大吉は、呆れて近藤中佐を眺めた。

関特演……、正しくは関東軍特別大演習と云う。これは、去年六月二十二日の独ソ開戦直後に決定されたものである。

——独ソ開戦は、ソ連を叩く絶好の機会だ。情勢に応じて、一挙に対ソ戦を実施し得る勢力を北満に集結しなければならぬ……。

この企図の下に行なわれた大動員をカムフラージュして関東軍特別大演習と称し、直ちに大兵力の移駐が開始されたのである。

当時の陸軍中央部は、東条陸軍大臣はじめ、殆んどが対ソ主戦論者であった。まっ正面から反対していたのは、武藤軍務局長くらいのものである。

大陸に関しては豊富な知識を持っている松岡外相でさえ、独ソの開戦は、日本がシベリヤへ侵出す

る好機と考えたほどであった。

かくて……、極秘裡に、北滿へ北滿へと將兵が移動して行つた。

が……突如として行なわれた大召集が、国民に不安を抱かせぬ筈はなかった。

——またも雪空、夜明けの寒さ、滿州思えば、身にしみる……。

——思い出すとも、出させちゃ済まぬ、命ささげた、ひとじゃもの……。

こんな歌が、巷を流れたのもこの頃である。征^いで立つ兵士へ贈る、素朴な愛情の現われであつた。だが……、その後、世界の情勢は、変化していた。

ドイツのリップントロップが、対ソ戦六カ月終了を誇号したにもかかわらず、戦線は動かぬままに冬を迎えてしまった。ソ連の冬將軍作戦は、ナポレオン敗走以来のお家芸である。ドイツは、ズルズルズルと、抜きさしならぬ蟻地獄へひきずりこまれている。

そして、昨年十二月八日……。日本は米英と開戦してしまった。

いまや、北進作戦どころか、日本は、広大な太平洋全域に拡がった戦線を維持するのに苦心している……。

「近藤さん……、いまとなつては、関特演なんて、茶番ですよ」

「馬鹿云え……。現に、いましがた宮脇さんも征かれた。北辺の護りは不動にせねばならん」

「あー、そう云う意味……。攻勢転じて守勢となったわけですね」

「おい、食えよ……」

近藤中佐は、はこばれたビフテキの皿を、大吉の方へ押し出した。

「久しぶりだなァー」

「内地じゃ、テキもカツも食えんようだねえ」

「買い出し、闇売り、物交……、僕が、奉天新京間の列車の中で、一番驚いたのがなんだと思いますか？ 女ですよ。綺麗だなァ、満州にいる日本の女は……」

「内地の女は、そんなに汚いか？」

「体の中は栄養失調、外は白粉ッ気なしで、モンペにセーター。魅力ないなァ」

「そんなこと云うと、カバンの中の奥さんから恨まれるぞ」

「ええ……。ひと口、こんなビフテキを食わせてやりたかったですよ。直接の死因は狭心症ですがね、本当は防空演習の過労と栄養不良ですよ。うちがとなり組長だったもんだから、馬鹿正直に働きたがった」

大吉は、憎らしそうに、ジュースと血の出るビフテキを切り刻んだ。

「こちらも、だんだん窮屈になつて来たよ。ま、いまんとこ、米や肉類は充分にあるが、砂糖がなくなつたよ」

「酒は？」

「ハハハ……、あるある！ 最近開拓団で日本酒を造りはじめた。なかなかいい酒が出来るぞ。目下、日本酒、支那酒、ロシアのウオッカ、みんな揃つとる」

そういうときの近藤中佐は、いかにも村夫子然とした好々爺だった。

「——しかし、君はええことをしたな……。大東亜戦勃発の日を東京で迎えたんだから」

「それが、いいことですか？」

「わしは、日露戦争の日は、下谷の小学校にいたが、あの日二重橋前へ行つて万歳を唱えたときの感激は、いまだに忘れられんよ」

「そう云われると、僕も、あの日のことは忘れられないでしような」

近藤中佐は、わが意を得たりとばかりうなずいた。

が……、大吉が考えていることは、雲泥のひらきがあつたに違いない。

あの日……、大吉は、アパートの布団の中で、開戦の放送を開いた。

「やったなッ……」

なんだか、スーッと地底へ足を引っぱって行かれるような気持ちだった。

そして、五分後には、アパートを飛び出し、永田町の総理官邸へ円タクを飛ばしていた。

「——星野さん……」

大吉は、ノックもせず、書記官長室へ入って行った。

——満州のニキススケ……。そのニキとは、関東軍参謀長の東条英機と、満州国総務長官の星野直樹のことである。大吉は、関東軍と満州国國務院を受持っていた関係から、東条や星野とは親しい間であつた。

「——あー、君か……」

星野は、広い書記官長室にただひとり、大きな事務机に向つて、腕組みをしていた。

午後七時過ぎ……。

大戦争へ突入したと云うのに、総理官邸は意外なほど静まり返っていた。

「どうなるんです?！」

「始まった以上、行くところまで行くさ」

星野の鋭い眼が、太い黒縁の眼鏡の奥で、チラリと笑つた。

「勝算は?」

「兵隊に聞けよ」

その時、ガターンと、ドアの音を大きく響かせて、ツカツカと、東条が入つて来た。

「——あー、東条さん……」

が、……東条は、ギョツとしたように大吉を見ると、パクパクと、口を動かすと、何も云わず、苛々と部屋の中を歩き始めた。

顔色は、蒼ざめていた。何か紙きれを握り締めていたが、その手が、ブルブルと震えているのが大吉にもわかった。

「——東条さん！」

星野が、ヌーッと、立ち上った。

「落着いて下さい、東条さん。あなたは、昨日までの東条ではないッ。今日からは、世界大戦史上の東条ですぞッ」

東条は、ふッと立ち止まると、チロツと、星野の方を見た。

「——うん……」

ひと言、軽くそう云うと、東条はクルリと体を廻し、書記官長室を出て行ってしまった。

大吉は、その時東条が持っていたのが、開戦第一回の記者会見に於ける東条談話の草稿であったことを、あとで知った。

大吉が近藤中佐に、——わたしも忘れられないだろう……と云ったのは、あの時の書記官長室に於ける異常な情景のことであった。

2

大吉が、社長や重役に着任の挨拶をして編集局へ戻って来ると、今度の異動で編集局の取材部長か